

# めいぼくせんだいはぎ 伽羅先代萩

## 〔解説〕

天明五年（一七八五）正月、江戸結城座初演。松貫四（まつかんし）・高橋武兵衛・吉田角丸（よしだつのまる）作。九段続きの時代物。先行の歌舞伎作品に「伊達競阿邦戯場（だてくらべおくにかぶき）」などを加えて浄瑠璃化されたもの。仙台藩・伊達家のお家騒動を取り扱った作品としては最も有名。芝居でも度々上演され、特に忠義と親子の愛情の板挟みになる乳母政岡を描く六段目「御殿の段」は聴く者の涙を誘います。六段目の前半は俗に「飯炊（ままたき）」、後半は「政岡忠義（まさおかちゆうぎ）」と呼ばれています。

## 〔あらすじ〕

奥州城主の義綱は、吉原の遊女高尾に入れあげて国を顧みないために隠居を命じられ、幼い鶴喜代（つるきよ）君が跡目を継いでいました。しかし、この機に乗じてお家乗っ取りを企てる仁木弾正（にきだんじょう）一味に命を狙われ、鶴喜代君の乳母政岡（まさおか）は、用心のため若君を病氣と称し人々の出入りを制限、我が子千松（せんまつ）をお毒味役にし、食事もすべて自らで整えていました。しかし敵方の計略で若君は危うく毒入りの菓子を食べさせられそうになり、千松が身を呈してその場を救ったのです。その後、弾正等の悪事は露見するところとなり、幾人もの人の命と引き換えにお家は無事存続となるのでした。

◇竹の間の段◇

仁木弾正一味から鶴喜代を守るために、病気といつわり男を近づけぬようにする政岡でしたが、敵方も策を巡らし政岡を陥れようとします。若君への見舞いと称して現れた一味の妻、八汐ら一行。そこへ天井裏に配された曲者加わり、一芝居して政岡に罪を着せようとします。しかし、八汐はこの不自然さを沖の井に咎められ、その場は事なきを得るのです。

◇御殿の段◇

曲者騒動も治まり、お腹をすかせた若君とわが子に何とか茶道具で食事を作り食べさせようとします。空腹を堪え、けなげに振る舞う子どもたちに、政岡は涙を堪えにぎり飯を作ります。

そこへ、梶原景時の妻、栄御前(さかえごぜん)が頼朝公からのお見舞いと称し、毒入りの菓子を持って現れます。栄御前が頼朝公からの菓子が食べられぬのかと、鶴喜代君にその菓子を食べさせようしたところ、千松が走り出て菓子を食べてしまいます。千松は毒に苦しみ始めますが、それを見た一味の八汐は、悪事が露見するのを恐れて、すぐさま千松を刺し殺してしまいます。我が子が無惨に殺されても顔色一つ変えない政岡を見た栄御前は、政岡が取り替え子(若君と千松を入れ替える)をしており、実はお家を狙う一味の味方であると勘違いをして、悪事の計画を打ち明けて帰って行きます。一人になった政岡は、千松の遺骸を抱きしめ悲嘆にくれます。

その後、様子を別間より窺っていた八汐が政岡の前に現れます。しかし、同時に沖の井と小巻も現れ、悪計を暴き、政岡は八汐を倒して千松の仇を討つたのです。

## 竹の間の段

制すべき身の制せられ、光失ふ義綱公、蟄居ましま

すその上に、代継ぎの若の所労とは、云ひ含めたる

お乳が計らひ、所存は深き奥御殿の、出入りを堅く

改めて、むさと風だに通さざりけり。

竹の間の襖押し開き、信夫の庄司が妻女沖の井、続

いて渡会銀兵衛が妻の八汐、廊下渡りで立ち止まり、

「イヤ申し沖の井様、若君御心地例ならずとて、こ

の頃では御膳もかつふつ召し上がられぬ由。その上

男たる者はお嫌ひなさるとあつて、近習の人々も御

前へ出る事ならず、お乳政岡殿ばかり、お傍を離し

給はぬとはどふした御病氣、私はとんと合点が行か

ぬ」

「さればいな。我々もこの様に毎日／＼上りはすれ

ど、女中方の取次ぎで、御機嫌を伺ふばかり。今日は

何卒御対面を願ひ、御様子をとくと窺ひ奉れと夫の

云ひ付け」

「ヲ、そふでござりませふとも。今朝伯父御刑部様

よりお使ひ立ち、家中にても重たるべき者共の、女

房などは苦しかるまじ、対面を致さるゝ様に計らへ

よと、お乳の人へ仰せ付けあつたれば、今日は是非

ともお逢ひ遊ばさるゝでござりませふ」

と、噂半ばへ腰元立ち出で、

「殿様これへ御出で」

と、知らせの中に、まだ頑是なき鶴喜代君、お傍しの

お伽も同い年、政岡が子の千松が、昇いて出でたる

鳥籠の、

「エイ／＼サツサ」

愛らしき。後に付き添ふお乳の人、はつと二人は頭

を下げ恐れ敬ひ奉る。

政岡御前に手をつかへ、

「為村の妻女沖の井、渡会の内室八汐、御病氣御伺ひの為上られました。御挨拶遊ばしませ」

と、お乳が詞に点き給ひ、

「ヲ、二人ともよう見舞ふてくれた、大儀く」

と情ある仰せにはつと恐れ入り、

「御悩み以ての外と承りしに合はしては、御顔持ちもやつれ給はず、先づはお嬉しう存じ上げます。しかし御膳もしかぐ召し上がられぬ由、それでは自然と御身の弱り。何卒おすゝめ申し上げたき、聊か用意致しました御配膳、差し上げたう存じます。ソレ女中方、沖の井が持参致せし御膳、ソレく早う」

「はっ」

と答へて腰元が捧ぐる御膳目八分、御前に直せば嬉しげに、

「そんならもう飯を食べても大事ないか」

と、座に着き給へば政岡が尻目にきつと睨まれて、

「イヤ欲しくない、厭ぢやく。アレ見い千松、雀が飯を喰ひたいやら、口を開いてさもしい奴の。笑へく」

と手を叩き、紛らし給ふ有様は、お乳に心を沖の井も様子あらんと控ゆれば、八汐は席を進み出で、

「コレ政岡殿、御膳も召し上がられぬ程の事ならば、なぜ典薬は召されぬぞ」

「サアそれに油断とてはなけれども、男体せし者をお嫌ひなさるゝ故、御容体書にてお薬調合せせるばかり」

「サアさう承りし故心付きしは、御典薬大場道益が

妻の小巻こそ、夫に劣らぬ医術の者。お脈伺はせん  
為召し連れた。ソレ小巻を御殿へ通されよ」

と、押し付け業も悪工み、しめし合はせて奥の間へ  
やがて呼び出す女こそ、遠に医師のつまはづれ、は  
るか末座に控へ居る。

「フ、これは／＼、道益殿の室小巻殿とやら、若君  
様の御脈体、御伺ひ遊ばされよ。サ近う／＼」

の口移し、御免を請けて御傍へ臆る色なくにじり寄  
り、御手を取って頭を傾け、押さへつゆるめつ暫く  
考へ、

「コリヤコレ今をも知れぬ御脈体。モウ／＼／＼耆  
婆扁鵲でも叶はぬ大事」

と、云ふに皆々顔合はせ、暫し詞もなかりしが、心半  
乱政岡は、若君しつかと抱き締めて、

「ムウ御大事と云ふてこの上の事があらうか。見損

じなりとて御咎めはあるまいぞや。とくと心を鎮め  
て、今一応も再応も診脈あれ」

「ハ、成程、只今伺ひ奉る御脈は絶体絶命。さりな  
がら、御面体の血色には、少しも恙ましまさず。恐れ  
ながらお居間を移し、今一度お伺ひ申さん」

と、座を下がれば政岡も、小巻が傍へすり寄れば、再  
び探る浮沈遅速、とくと伺ひ、

「コリヤどうじゃ。あれなるお居間で見た時は必定  
の御死脈。今又これにて伺へば、随分健やかな御脈  
体。ハテ心得ず」

とお居間の方、きつと見やればすかさぬ人汐、掛け  
たる長刀おつ取って、石突き突つ込み天井の板こぢ  
放せば怪しき曲者、落つるをその俣取って伏せ、通  
路の鈴の縄引つ切り、高手にしつかと縛めたり。

「サア／＼／＼死脈の筋が現はれた。有様に白状せ

い。陳ずるに於ては拷問にかけん。サア〜何と、  
〜」

と締め上ぐれば、

「ア、コレ〜申し、申します〜〜わいの。イヤモたかゞ鶴喜代君を殺したら褒美やらう、殺してくれとある故、ハイ〜〜、欲から頼まれた事でござりますわい」

「ム、シテその頼み手の名を聞かう。サ云はずば水責め鉄砲ひしぎ」

と、搦めし腕に長刀差し込みこち上ぐれば、

「アイタ、〜、ア、云ひます〜、イヤモ有様に云ひますわいの。ハテ何とせふ、かうなつたらモウ叶はぬ。コレ〜〜今白状する程にの、必ず恨んで下さるなや。アいとしやの、ハイ〜、これも子故の聞からでござります。アレアノ千松が世に立て

たい、どうぞ若君を打ち殺してくれと、アノお乳の人の頼み故」

と、聞くより政岡氣をせき上げ、

「ヤイ〜〜黙りをらう。モあんまり呆れて詞が出ぬ。ついぞ見知らぬ下郎めが、大それた事云ひかけしは、エ、聞こへた、この政岡に難を付け、和子のお傍を追ひ退けんと、コリヤ工んでの拵へ事ぢやな。おのれその方人を、白状させて見せふぞ」

と、勢ひ込んで立ちかゝるを、八汐が隔て、

「さうはさせぬ。アノマア猛々しい顔わいの。知れてあるわいの」

「ム、そりや何故に、マ何を証拠」

「ヲ、その証拠はコレこの願書。鶴ヶ岡の松が根に、人形諸共埋めてあつた。若君を呪ふ恐ろしい文言、



ます」

「ヲ、おれも一緒に行かうぞよ」

「エ、くそりやマア何を御意遊ばすぞいの。アノ

政岡は、お家を狙ふ大科人」

「イ、ヤ科人でも悪人でも、乳母一人はやる事ならぬ」

「デモ、伯父御刑部様の仰せ付けられ」

「イ、ヤその刑部もそち達も、皆おれが家来ぢやないか。それ程牢へ入れたくば、政岡が代はりにそち達から牢へ行け。乳母と離れている事は厭ぢや、く」と取り継り、乳房の恩を子心にも、忘れ給はぬ御仁心。有難涙お乳の人、

「勿体なや」

と抱き締め、泣くより外の事ぞなき。

「エ、齒掻いやの。イヤモ何ぼお庇ひなされても、

政道には代へられぬ」

と、又立ちかゝるを沖の井が、引き戻して押し隔て、

「イヤ政岡殿に科はない」

「デモ曲者が慥かな白状」

「イヤサア、華陀が血筋か、薬師の化身か知らねども、高で女のアノ小巻が、御死脈と考へて、天井を見たり目遣ひを、見るとその俣長刀で、天井の板一二枚、突き放した僅かの間から、わざく飛んで下りたる曲者。あんまり手筈がよう過ぎて、この沖の井は合点が行かぬ」

「ム、ホ、ホ、ホ。ア、どうなりと、非難は付けよい物ぢやな。シタガ、何ぼ御発明でもコレこの願書。願主松ヶ枝節之助、乳母政岡とありく」と

「サ書いたが覚へない証拠」

「ソリヤ又何故へ」

「さればいなあ。左程の工みをする者が、我が名をあり／＼記し置き、後の難儀になる様な、あざとい事しておきさうな物と思し召すか。ガもしやその名が八汐とあれば、お前は科を蒙る気か」

「サアそれは」

「ホ、ホ、ホ、。人を呪はゞ穴二ツと、詮議立てする八汐様、お前の胸が心得ぬ」

と、工みの底を見透かせしは、遠に庄司為村が奥床しくぞ見へにけり。

「フ、モウよいわいな。テモマアつべこべとようおつしやるの。ガ所詮分からぬ水掛け論。マアこの俣にさし置いて、油断のならぬ御殿の様子、今宵は八汐が宿直する」

「ハテナア、それは御親切なお心付き。イヤナ二政岡殿にも、随分と心を付け、若君様の御介抱、ナ。サ

御病気の根を糾したら、さつぱりと御本復。イヤモウ、大概見脈でも知れてある一味の、サア一味の薬でもナ、効き目がきつい、油断はならぬ。ノウ小巻さうでないか。イザ八汐様御休息」

と、上辺は浅う底深う、漂はされて兩人は、磯へも寄らず沖の井が、目鏡はづさぬ一捌き。

「曲者引け」

と嚴重に、心は隔つ竹の間の襖

## 御殿の段

押開け入りにけり。

あと見送りて政岡が、まさなき事も身にかゝる。科は晴ても晴やらぬ、養ひ君の行末を誰に問ふべき様もなく心一つの重き思ひ、もの案じなる母親の顔を眺むる千松に鶴喜代君も打守り

「コレ乳母、モウ何云ふても大事ないかや」

「ハイ〜他に誰もおりませず、何なりとも御意遊ばせ。ほんに、さつきに沖の井殿、若へ御膳を上げたとき、かねて乳母が申した事、お聞き分け遊ばして、ようマアお上り遊ばさなんだナ。それでこそ、この乳母がお育て申した若殿様、ヲ、おでかしなされた、<sup>あつは</sup>適れな」

と誓むればあどなき稚な氣に

「ヤイ乳母、ひもじいと云ふ事は強い武士の云はぬ事と、常に其方が云ふた故、おれは云はねど、さつきにから空腹になつたはやい」

「ヲ、お道理でござります。今日は思はぬこと故に、御飯の拵へも遅ふなり、あなた様にもさぞお待ちかね、千松もよう辛抱しやつた。もう拵へてあげます」と立ち上れば

「ノウ乳母、こゝにある、この膳を食べるのは悪いかや」

「ア、イヤ申し、その御膳を上る程なれば乳母も苦勞はいたしませねど、このほどから怪しい事ども。忠義厚き沖の井殿、差上げられたその御膳、疑ひはなけれども、油断のならぬこの時節、上げてよければ、この政岡が上ます。コレようお聞き遊ばせや。

いまお館には悪人はびこり、御近習、小姓、膳番ま

で、ちつとも心は許されず。忠臣の節之助は不義者として遠ざけられ力とする者もなく、朝夕の御膳は皆庭へ棄てさせて、私が手づから拵へて差上るも、もし毒、サ毒薬の工みもと微塵も心は許されず。空腹なもお道理ながら、御前のお堪へ遊ばすため、この千松も四、五日前から三度の食事もたつた一度、忠義故ぢやと堪へてをります。コレ千松、其方は云ふ事よう聞いて何とも云はずに辛抱する。ヲ賢い／＼強い／＼強者じや」

と誉れば、千松

「コレ母様、侍の子といふものは、ひもじい目をするが忠義ぢや、また食べる時には毒でも何とも思はず、お主のためには喰ふものぢやと言はしやつた故に、わしや何とも云はずに待つている。その代り、忠義をしまふたら早う飯を喰はしてや。それまで

は明日までもいつまでも、かうきつと座つて、お膝に手をついて待つてをります。お腹がすいても、ひもじくない、何ともない」

と洗面作り、涙は出れど稚な氣に誉められたさがいはいに

「こちや、泣きはせぬわえ」

と額を撫て泣顔を隠す心は流石にも、名におふ武士の胤なりき。母は健気さ、いじらしさ、目に持つ涙、心には御前に聞かす誉め詞

「ヲ、さうぢや／＼強者ぢや、千松はいかう強うなりやつたわいの」

「イヤ千松より、おれが強い。ヤイ政岡、おれはちつとも空腹にはないぞよ。大名といふものは飯も何も食はずに、かう座つてゐるものぢや、ノウ乳母、おれは強者ぢや」

「これはまた、けうとい事の。さうお行儀な所を見ては、またく千松などは叶はぬく、ヲ、お強いお強い。さうお強うては、こりや早う飯を上げざるまい。ドレ拵へう」

とかい立つて、傍に飾る黒棚より取出す錦の袋物、風炉にかけたる茶飯釜湯の試みを千松に飲ます茶碗も楽ならで、お末が業を信樂や、いつ水指を炊き桶、流す涙の水こぼし、心も清き洗ひ米、釜に移して風炉の炭、直してあふぐ扇さへ骨も砕くる思ひなり。

「ソリヤもう飯ぢや」と喜ぶ子

「コレ千松、何ともないと云う下から、せはしない何の事ぢや。いつも歌ふ雀の唄、歌ふて御前の御機嫌とりや、エ、鈍な子であるわい」

と呵られておろく涙、しゃくりながらのしめり声

「こちの裏のちさの木にく、雀が三足止まつて止まつて、一羽の雀が云ふことにやく」

「ア、コレタベ呼んだ花嫁御々々々」

竹の下葉を飛下りて、籠へ寄りくる親鳥の餌ばみをすれば、子雀の嘴さし寄する有様に

「アレく乳母、雀の親が子に何やら喰はしおる、おれもあの様に早う飯が食べたい」

と小鳥を羨む御心根

「ヲ、お道理ぢや」

と云ひたさを紛らす声も震はれて

「わしが息子の千松がく。コレ千松、殿様の御機嫌を、何を泣顔する事がある。小さうても侍ぢや、コレ七つ八つから金山へく、一年待てども、まだ見へぬく」

「乳母、まだ飯はできぬかや」

「ヲ、もう出来ます。二年待てども、まだ見へぬ  
まだ見へぬ」

「母様、飯はまだかいの」

「エ、せはしない。其方までが同じ様に行儀の悪い」

「イエ、わしは食べたい事はなけれど、御前様がおひもじからうと思ふて」

「エ、何のお強いお殿様がおせがみなされう、ソリ

ヤ其方がせがむのぢや」

「イエ、わしはせがみはしませぬ」

「サアせがまずば今の唄、声はり上げて歌ふてみや」

と云はれて涙の声はり上げ

「ほろり、とお泣きやるが、」

力なく、泣声を隠してつれる母親が

「何が不足でお泣きやるぞ、」

唄ふ唱歌も身に当る涙はお乳が胸の内、子故の闇ぞ

やるせなき。若殿、小蔭を打眺め

「アレ、千松、ちんが来る呼べ、」

「ちんよ来い、」

と呼べば駈けくる縁の上

「ヲ、よい所へよう来たな。ア、ほんにわれは仕合者、おすべりのこの御膳、殿様の御機嫌を直した御褒美戴け」

と紙祈敷いて並ぶれば喜ぶ体を見る若君

「コレ乳母、おりや、あのちんになりたい」

と羨み給ふ御風情聞く悲しさを堪へかね

「ヲ、お道理ぢや、日本国のその中に幾億万と限りなき人の果報を受け給ひ、五十四郡の御主と栄耀栄華は上もなき、何くらからぬ御身にて思ひがけなき御辛抱、例へ賤しい下々でも、かういふ事があるものか。ましてや、つひに見も聞きも涙ながらに

政岡が申す事とて大人しう聞き入れ給ふ痛はしや、  
現在御内の御家来が邪、非道に組従ひ、殺害せんと  
の工みとは知つたる故に影身に付添ひ、お健な御身  
を御病氣と世間を偽り胴欲に、幼い御身に朝夕さへ  
思ふ様に上げぬ故、鳥獸の餌ばむのを羨しがるお詞  
は御尤ともお道理とも云ふに云はれぬ御身の因果、  
雀や犬に劣つたる宮仕へして忠義ぢやと云はれうも  
のか」

と食ひしぱり胸も煮立つ風炉先の屏風にひしと身を  
寄せて奥をはばかり忍び泣き。幼けれども天然に大  
守の心備はりて

「コレ乳母、何で泣くぞいやい。其方や千松も食べ  
ぬうち、おれ一人せはしいと思ふなら、もう堪忍し  
て泣いてくれな、其方たち二人が食べぬうちは、い  
つまでも堪へている。おれが食べても乳母が食べず

に死にやつたら悪い、ナ、千松其方が死んでも悪い  
ナア」

「ハイくくくよう仰つしやつてつかはされます。  
ア、有難うござります。乳母がいま泣いたのはアリ  
ヤ飯の早う出来る呪、何にも悲しい事はござりませ  
ぬ。コレモウ涙はない。ナ御覧じませ。ホ、ハ、ヲ、  
可笑しいく。サアく今の呪でもう飯が出来まし  
た。いつものやうに、にぎにぎして上げましよ」  
と飯匙いしが取つて手の内に結ぶを千年と待ちわびて、手  
を出し給へば

「マアくお待ち遊ばせや。吟味の上にも吟味をせ  
ねば御幸抱の甲斐がない。まづお毒味」  
と千松が顔を眺めて

「ム、氣遣ひない。サアく御前、お心静かに召し  
ませ」

と云ふにいそ／＼お喜び、千万石を手の内に握る御身に引替へて、ただ一握りの握り飯を数の珍味と思し召す、御心根の勿体なやと君を思ひ、わが子を思ひ心の奥の信夫山忍び涙の折からに

「梶原様の奥方御入り」

「ハテ心得ぬ。梶原の奥方とは、何にもせよ、お通し申せ。コレ千松、其方は次へ、常々母が云ひし事、必ず／＼忘れまいぞ。サア早う／＼」

と追やつて衣紋繕ふその内に沖の井八汐も出迎ひ敬ふ

襖押開かせ梶原平三景時の奥方、夫の権威に栄御前しと／＼と座に直り

「ヲ、どれ／＼も出迎ひ大儀、自ら今日来りしは右大将よりの御上使、夫景時承はれども義綱の一子鶴喜代、病気によつて男たる者を禁じたと聞きし故、夫に代るこの栄、義綱隠居のその後、鶴喜代の所労ことに食事も進まぬ由、御心を付けられしこのお菓子、頼朝公より下され物、有難く頂戴あれ」

と持たせし菓子箱、差出せば八汐引取り

「コレハ／＼有難い、大将よりの下され物。サアサア申し若殿様、早う頂戴遊ばしませ」

と蓋押開き

「テモマア見事、結構なこのお菓子、イザ召しませ」と差出す。さすが童の嬉し気に立寄り給う鶴喜代君

「ア、申し御前様、またその様なさもしい事、御病



でもかこれでもか」

となぶり殺しに千松が苦しむ声の肝先へこたゆる辛さ無念さを、じつところらゆる辛抱は、ただ若君が大事ぞと涙一滴目に持たぬ男勝りの政岡が忠義は先代末代まで、またあるまじき烈女の鑑、いまにその名は芳しき。栄は始終、政岡がそぶりに気を付け打ほ、  
笑み、

「ヲ、でかした八汐、右大将より鶴喜代へ下さるゝ大切のお菓子、小倅めが出しやばつて、すつての事に大事の工みイヤアノ大事の菓子を荒らした科、殺したは八汐が働き、さすが渡会銀兵衛が妻ほどある。

政岡には自らが言ひ聞かす事もあり、沖の井、八汐両人は暫く次へ間を隔て遠慮召され」

と栄が詞何と違変も沖の井が深き心も和田津海の汐の八汐も打連れて、伴ひ一間へ入りにける。

後先き見廻し栄御前、政岡が傍にすり寄つて

「年ごろ仕込みし其方の願望、成就してさぞ喜び」

「エ、何とおつしやる」

「ア、イヤ、モ隠すに及ばぬ。東西分ぬ内よりも、取替へ置きし其方の子の鶴喜代が身に恙なう、義綱の誠の倅千松がこの最期さぞ本望であらうのう」

「エ、」

「ヲ、取替子の様子は先立つて知つたれども、もしやと思ひ最前から窺ふて見る処、血縁の子の苦しみを何ぼ気強い親々でも、耐へられるものぢやない。

若殿にしておく我がが大事、其方の顔色変らぬは取替子に相違はない、スリヤ皆心は同腹中、刑部殿とも内談しめ諸事わが夫の差図あらん、まづ今日は立帰り病氣の様子申上げん、必ず何事も人に悟られまいぞや」

と一人呑み込み悠々と館をさして帰らるゝ。

後には一人政岡が奥口窺ひくゞて、わが子の死骸抱き上げ、耐へ耐へし悲しさを一度にわつと溜涙、せき入、せき上げ嘆きしが

「コレ千松、よう死んでくれた、出かしたナく、其方が命捨てた故、邪智深い栄御前、取替子と思ひ違へ、己が工みを打明しは親子の者が忠心を神や仏も哀れみて鶴喜代君の御武運を守らせ給ふか。

ハ、ハ、有難やく。これと言ふのも、この母が常々教へておいた事、幼な心に聞分けて手詰めになつた毒害を、よう試みてたもつたのう。ヲ、出かしやつた出かしやつたく、其方の命は出羽奥州五十四郡の一家中、所存の臍を固めさす誠に国の礎ぞや。とは言ふものの可愛やなア、君の御為かねてより覚悟は極めていながらも、せめて人らしい者の手にかゝ

つても死す事か、素性賤しい銀兵衛が女房づれの刃にかゝり、なぶり殺しを現在に傍に見てゐる母が気は、どの様にあらうマどうあらう。思ひ回せばこのほどから歌ふた唄に『千松が七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見へぬ、二年待てどもまだ見へぬ』と唄の中なる千松は待つ甲斐あつて父母に顔をば見する事もあらう。同じ名のつく千松の其方は百年待つたとて千年万年待つたとて何の便りがあるぞいの、三千世界に子を持つた親の心は皆一つ、子の可愛さに毒なもの食べたと云ふて呵るのに、毒と見へたら試みて死んでくれいと云ふ様な胸欲非道な母親が又と一人あるものか。武士の胤に生れたは果報か因果かいじらしや、死るを忠義と云ふ事は何時の世からの習はしぞ」

と凝り固まりし鉄石心、さすが女の愚に返り人目な

ければ伏し転び、死骸にひしと抱きつき前後不覚に  
嘆きしはことわり過ぎて道理なり。後にすつくと八  
汐の大声

「何もかも様子は聞いた。此方の工みの妨げ女、己  
も生けては置れぬ」

と突つ込む懐劍打落し直ぐに切込む八汐が肩先、ひ  
るむを取つて突通され虚空を掴んでもがき死に、悪  
の報ひは忽ちに心地よくこそ見へにけり。

「手柄、手柄」

と沖の井が、ともに喜ぶ千代八千代、竹に雀の葉を  
のして栄ふる御代こそめでたけれ。

※演者・時間などの都合により抜き差しがあります。